

## 広島県神石高原町猿ヶ馬場第1号古墳の測量と周辺古墳

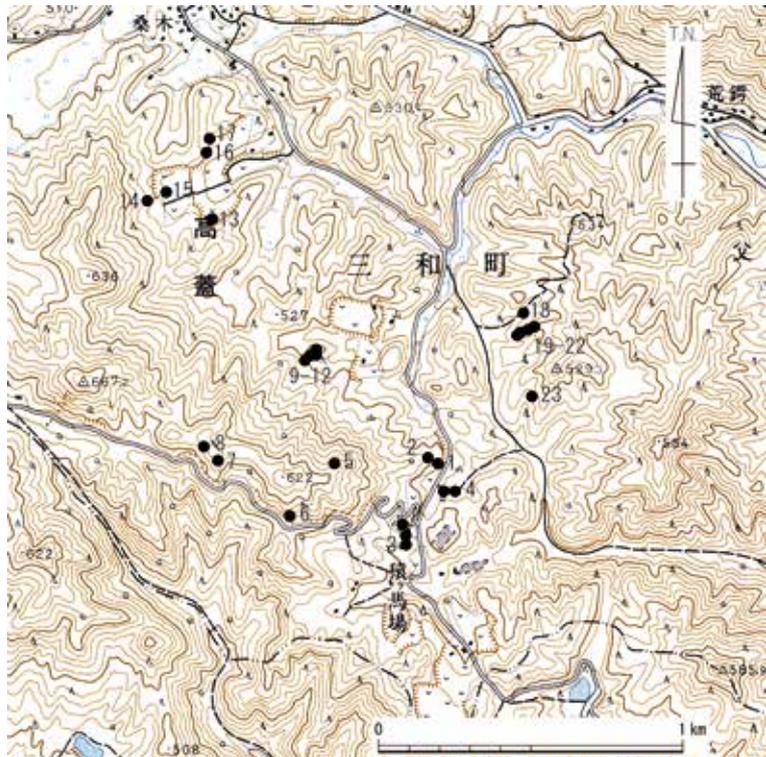
野島 永・有松 唯・舩越 雅子  
宇野 真太朗・竹田 千紘・森本 直人

### 1. はじめに

広島大学考古学研究室では、2020（令和2）年度に神石高原町立歴史民俗資料館や広島県立歴史博物館など数カ所に収蔵されていた神石高原町高蓋塚谷古墳出土資料をまとめて報告した（野島・森本・藤澤・下江2020）。戦後間もないころの遺物写真から、TK43型式新段階ごろに築造された横穴式石室であること、また瓢形環状鏡板付轡と壺鏡、雲珠や鍔付大刀をもつことから、備後山間部の首長墳であることを示す証拠を得ることができた。瓢形の環状鏡板付轡についてはその分布域が吉備地域に偏在することから、吉備地域における渡来系工人の受容と先進的な馬具生産を示す可能性が指摘されており、注目すべき調査事例となった。

高蓋塚谷古墳から南東へ5kmほどのところには、猿ヶ馬場古墳群や中山四ツ塚古墳群、相談谷古墳群、芸人山古墳群などといった無袖横穴式石室が集中しており、古墳時代後期から終末期、おそらくは6世紀後葉から7世紀中葉ごろを通して40基あまりの築造が知られている。しかし、これらの無袖横穴式石室の詳細な情報については、これまで公表されたことはなかった。

現地調査の結果、猿ヶ馬場古墳群出土須恵器を確認することができた。猿ヶ馬場古墳群出土須恵器は、神石高原町立高蓋ふれあい交流施設に保管されていたものであり、「出土品 猿ヶ馬場（三和町）採取日 昭和59年6月23日」と書かれたラベルが付されていたのみであった。神石高原町教育委員会教育課川上翔太郎氏に調べていただいたが、す



第1図 猿ヶ馬場古墳群周辺遺跡分布図 (1/25,000)

1. 猿ヶ馬場第1号古墳 2. 猿ヶ馬場第2号古墳 3. 猿ヶ馬場第3～5号古墳（推定） 4. 猿ヶ馬場第8・9号古墳（推定） 5. 相談谷東古墳 6. 相談谷南古墳 7. 相談谷第1号古墳 8. 相談谷第2号古墳 9-12. 芸人山第1～4号古墳 13. 柿の木原遺跡 14. 柿の木原第2号古墳 15. 柿の木原第1号古墳 16. 柿の木原第2号窯跡 17. 柿の木原第1号窯跡 18. 中山たたら場跡 19-22. 中山四ツ塚第1～4号古墳 23. 大谷山古墳

で39年以上も前のことであり、寄贈者や出土地点など、その仔細は詳らかにはなしえなかった。このため、これらの須恵器がどの古墳から出土したものなのか、あるいは複数の古墳から出土したものが収集されたのかについてさえ、不明と言わざるをえない。しかし現状では、高蓋地区において保管されていた猿ケ馬場古墳群に関わる貴重な考古資料であることに変わりはない。古墳群に考古学的評価を与えるための基礎的作業として、出土遺物の実測<sup>(1)</sup>、石室周辺の地形測量、横穴式石室の実測、周辺古墳群の現況確認<sup>(2)</sup>などを行った。

またこのほか、広島県立歴史博物館に保管されていた高蓋地区の横穴式石室関連資料として、中山四ツ塚古墳群から出土した瓢形環状鏡板付轡と鍔金具を確認し、これらを図化した。轡は先年報告した高蓋塚谷古墳出土例（野島・森本・藤澤・下江2020）に類似しており、高蓋地区における後期古墳文化の様相を推し量ることができる重要な考古資料とみることができる。

ここでは現存していた猿ケ馬場第1号古墳の横穴式石室の構造、および第2号古墳の石室の遺存状況、周辺古墳群の現況を示し、関連出土資料の図化報告を行うこととした。

（野島・有松）

## 2. 猿ケ馬場第1号古墳の現況

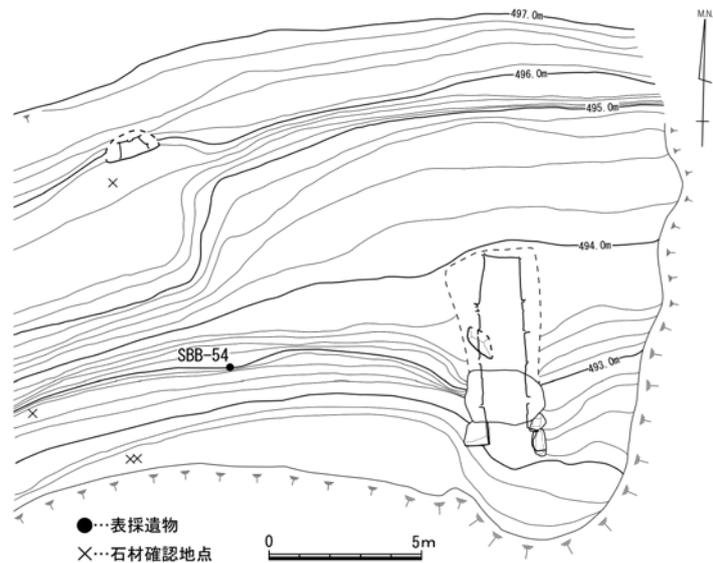
猿ケ馬場古墳群は旧芦田郡の最北端、広島県神石郡神石高原町桑木にある（第1図）。府中市市街地からおよそ9km、芦田川の支流、神谷川の最上流域に位置する。高蓋地区市街地からは県道26号線を南下し、新市・府中に抜ける県道417号線の合流点を右折してさらに1.2kmほど南下すると、右上手の尾根先端に猿ケ馬場1号古墳の横穴式石室開口部がみえる。県道の拡幅工事などにより、猿ケ馬場古墳群を構成する横穴式石室はほぼ破壊されたようで、



第2図 猿ケ馬場第1・2号古墳遠景

民家宅地内にある第1号古墳の石室のみ遺存していた。民地内なので自由な見学は難しいものの、現状では開口部から石室内部を観察することができる。しかし、墳丘自体はほぼ削平されており、往時を偲ぶことはできない。

猿ヶ馬場第1号古墳は奥行き6.4m、玄室幅1.2m、地元山塊からの花崗岩を利用して作られた横穴式石室



第3図 猿ヶ馬場第1・2号墳周辺地形図 (1/250)

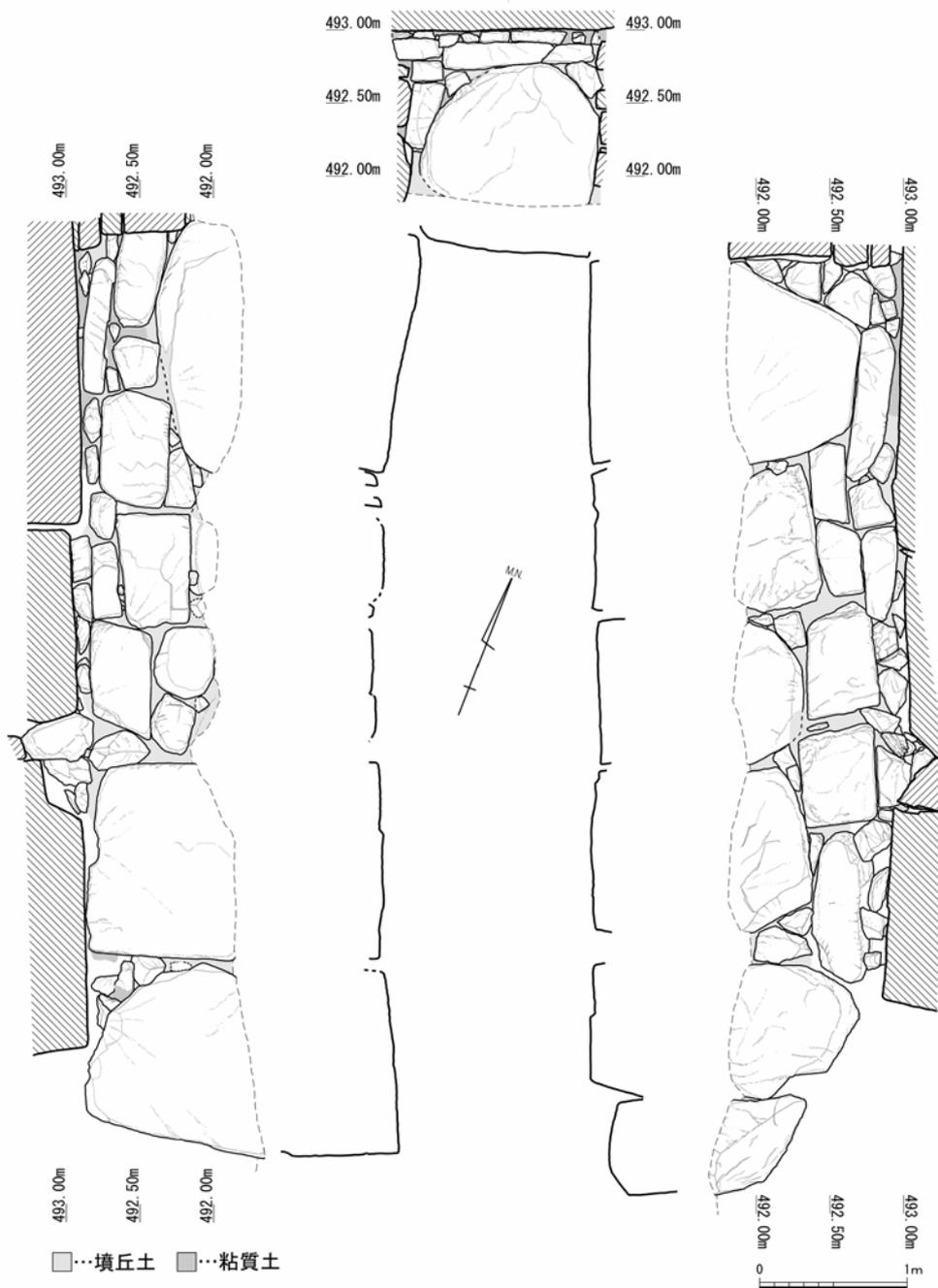
が遺存していた(第3図)。天井石にはわずかな土が載るのみであった。おそらくは墳丘が削平された段階で、天井石が露出していたのではないかと思える。石室奥壁の鏡石と、その左右両側に腰石を配置する。東壁を先に、西壁を後に2段目まで積み上げて、玄室基底部を形成する。その後、3段目石材を配置して、その上面に小石混じりの粘質土を充填して高さを調整し、天井石2枚を載せる。この段階で周辺の墳丘盛土を積み上げたと思われる。その後、羨道壁体を構築し、現在入口にみえる天井石を架構したようである。石材が不足していたためか、玄室部分に比べて補填粘質土の量が極端に多くなっていた。羨門付近は後世の植樹などにより攪乱が著しく、すでに失われた石材もあったと思われる。(野島・有松)

### 3. 猿ヶ馬場第1号墳の石室構造(図版第1～4、第4・5図)

猿ヶ馬場第1号古墳はほぼ南方向に向けて開口する無袖横穴式石室である。石室の規模は、奥行き6.4m、玄室長3.5m、玄室幅(奥壁付近)1.2m、玄室高1.2m、羨道幅(開口部付近)1.4m、羨道高1.1mほどである。天井石の奥壁側から2枚目と3枚目の間で両壁に縦目地が通るため、この位置が玄室と羨道の境であると考えられる。なお、天井構造は平天井である。石材はおもに花崗岩を使用し、詰石には安山岩などの他の石材を用いているところもある。花崗岩は古墳の近隣に転石として散在しており、周辺から採取されたものと推測する。縦約0.4m・横約0.8m以上の大きさの石は割石加工がおこなわれているが、それよりも小さい石については自然石が多い。

床面は流れ込んだとみられる土壌で覆われているが、石室内部にて床面のピンポール探査を行ったところ、現地表面から20cm未満の地点で礫のようなものの反応があった。床面は現地表面から浅いところにあった可能性が高い。しかしながら、これらの礫が石室構築時に敷かれたものか、後世に外部から持ち込まれたものかは不明である。

**玄室**(図版第1b・2・3、第4図) 奥壁は縦0.9m・横1.2mほどの鏡石を1石配置し、



第4図 猿ヶ馬場第1号古墳石室平面・壁面実測図 (1/50)

鏡石の上に東壁側で1石、西壁側で3石を組み合わせることで鏡石上端の高さで横目地を通す。東壁側の1石は東壁の石と噛み合うように配置する。鏡石の上段には縦20cmほどの板石を設け、天井石との間隙を埋めるようにして縦10cm以下の詰石を数個置いて粘質土を込める。粘質土はしまりの強い淡黄橙色土で、4mmほどの砂粒を20%ほど含む。東西壁の奥壁側でもみられ、この粘質土の範囲が同じ構築段階に構築されたことが想定できる。

東壁は奥壁側から腰石が3石用いられており、奥壁寄りの1石は縦0.9m・横1.3mほどで鏡石と同程度の大きさの石材である。羨道寄りの2石は縦0.5m・横1.0mほどの石材である。

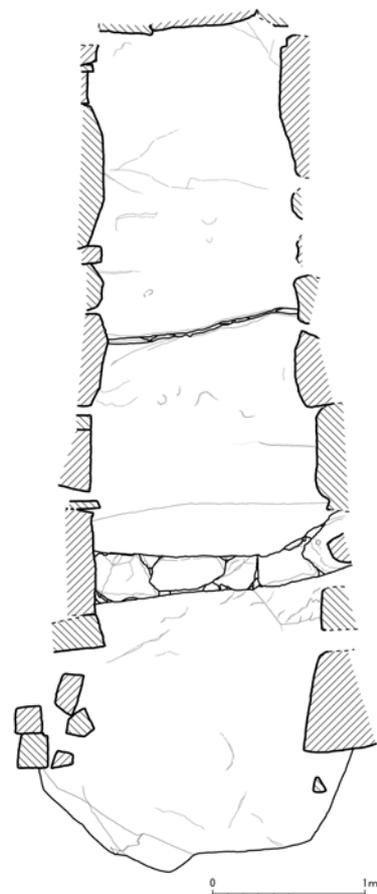
2段目には、鏡石と腰石上端と同じ高さで横目地が通るように縦20～50cm・横50～70cmほどの石材を配置する。3段目には奥壁と同じように縦20cmほどの石材を設置し、天井石との間隙に詰石を数個挟み込む。また、鏡石と奥壁側腰石との間には縦横40cm以下の石材を6石詰めて玄室の隅角を形成する。このうち2石が奥壁の1石と噛み合う。下から5石目の上端には前述の横目地が通る。なお、腰石より上側には2種類の粘質土を込める。1つ目は奥壁と同じ粘質土であり、奥壁から約40cmの範囲にみられ、腰石の奥壁側に詰められた石の範囲と重なる。2つ目は奥壁から約0.4～1.1mの範囲でのみみられる。この粘質土はしまりがやや弱い赤褐色土で、1mmほどの砂粒を1%ほど含む。

西壁では4石の腰石を用いるが、小さなものでは縦20cm・横50cmほど、大きなものでは縦0.6m・横1.7mほどと、大きさにばらつきがある。奥壁側から2石目と3石目の腰石の位置で縦目地を通し、この縦目地より奥壁側では3段、羨道側では2段の石材を配置する。縦目地より奥壁側の腰石の上段には、鏡石上端と同じ高さで横目地を通すようにして2段目の石材を配置するが、明瞭に確認できるのは奥壁側から3石目までである。この3石の大きさにもばらつきがあり、小さなものでは縦30cm・横40cmほどで、大きなものでは縦50cm・横80cmほどである。奥壁側の1石は奥壁に入り込んでいる。3段目には奥壁と同じように縦20cmほどの板石のほか、縦10cmほどの詰石を詰める。奥壁側から

1石目の腰石より上側には2種類の粘質土を込める。このうち奥壁から約1.1mまでの範囲では奥壁や東壁の一部と同じ粘質土を用いており、2段目の奥壁側から2石目までの石の範囲と対応する。2つ目は奥壁から1.1～1.7mの範囲でのみみられる。この粘質土はしまりが弱い明赤褐色土で、2mmほどの砂粒を3%ほど含んでいる。縦目地より羨道側では、3石目と高さを揃えるかたちで、4石目の腰石の上に1石設置したのち、2段目として縦40cm・横70cmほどの石を置く。その上部には玄室天井石との間隙を埋めるように10cm以下の詰石を詰める。

羨道（図版第2、第4図） 東壁では玄室と同程度の大きさの腰石を1石設置し、玄室と同じ高さで横目地を通す。東壁の構築方法は玄室と同じである。開口部には2石を配置するが、前庭部側の1石は平滑に割られた面を墳丘外に向け、斜めに配置する。

西壁では、鏡石と同程度の大きさである縦0.9～1.2m・横1.3mほどの石材を2石配置する。この2石を置いた後に玄室と羨道の上に石材を配置したと考える。2石の間には詰石とともに粘質土もみられるが、ほとんどが流出している。この粘質土はしまりが強い淡黄橙色土で、



第5図 猿ヶ馬場第1号古墳石室  
天井石実測図 (1/50)

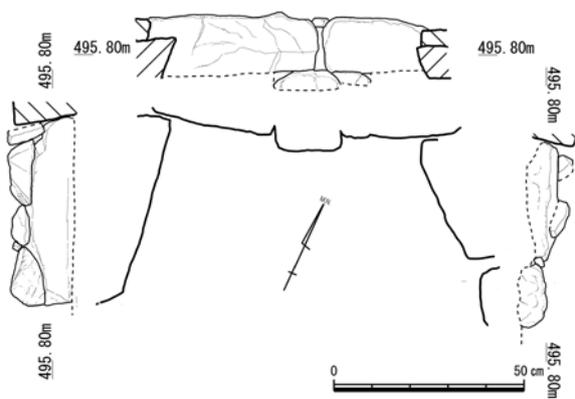
4mmほどの砂粒を20%ほど含む。また、前庭部側の1石は墳丘外を向く面が平滑に割られているものの、東壁とは異なり地面に対して直角に近い状態で配置される。

**天井石**（図版第4a、第5図） 天井石には玄室で2枚、羨道で1枚、計3枚の大型板石材を用いる。玄室の2枚の石の間には5cmほどの間隙があり、そこに小礫を挟む。石の安定や土の流出を防ぐ目的があると考えられる。玄室と羨道の天井石の間には玄室よりも広い20~30cmほどの間隙があり、短辺が20cm以上の石材を詰めている。この間隙は側壁の縦目地の位置とも対応しており、間隙を広くすることで目地と対応させたと考えられる。

**猿ケ馬場第1号古墳の石室構築方法** 鏡石と東壁の腰石にほぼ同程度の石材を使用して鏡石上端の高さで横目地を通し、東壁のほうが大ききの揃った石材を用いて構築する。これらから、鏡石を設置したあと、腰石を配して東壁優位で構築したと考える。東西壁には天井石の奥壁側から2枚目と3枚目の間隙と同じ位置で縦目地が通っており、前述の通り玄室と羨道の境であると考えられる。東壁では羨道に近づくにつれて腰石より上段にある石材同士の間隙が広がることから、石材同士の間隙を開けることで、縦目地を通すために不足した石材の分を補ったといえる。この位置は天井石にみられる玄室と羨道の境とも一致することから、玄室の側壁を構築し天井石を設置した後に、羨道の側壁を構築したことが想定できる。（船越）

#### 4. 猿ケ馬場第2号古墳の破壊と遺存状況（図版第6、第6図）

猿ケ馬場第2号古墳は後世に削平・石室の破壊を受けており、現状では一部露出した天井石の付近までが土砂により埋没している（図版第6a）。天井石の北側は山塊の一部となっているが、南側は現地表面との間にわずかな間隙がある（図版第6b）。この間隙を覗き見ると、北側と東西両側に崩壊した石積みを確認でき、これが奥壁と東西壁にあたるものであると想定した。石は鏡石・腰石の上部に設置された石材や詰石であると考えられる。したがって、遺存したのは奥壁側の天井石1枚とその付近の側石の一部のみである。側壁は天井石により、全壊を免れたのだろう。しかしながら、天井石は第1号古墳と比べると長さが極端に短く、割れ面が新しい。後世に割れ、一部が持ち去られた可能性が高い。遺存した規模は、長さ0.5m、幅0.7mほどである（第6図）。遺存した石材の状況から、開口方向は南南東である。第



第6図 猿ケ馬場第2号古墳石室略測図（1/20）

2号古墳についても、第1号古墳と同じく花崗岩をおもに使用しているが、詰石に用いられる石材の種類は第1号古墳よりも多く、自然石をそのまま使用したようなものもあった。石材は石室内側だけでなく側面も割り整えられており、この点も第1号古墳とは異なる。

第2号古墳の露出した天井石の南側には不自然な高まりがある。周囲よりも標高が0.8mほど高くなっており、天井石

の東側付近から、石室の推定開口方向とほぼ沿うようにして等高線が入った。この高まりにてピンポール探査を行ったところ、東西壁露出部分から南南東方向に石と思われる反応を多数確認した。埋没し、崩壊した石室の側壁に反応している可能性がある。天井石が奥壁側の1枚のみしか遺存していないことから、後世に天井石を転用するために天井石の付近まで土が盛られ、羨道部付近の天井石は持ち去られたことが想定できる。なお第2号古墳の南側に平瓶片1点(図版第13b-36、SBB54)を表採した。表採位置は第2号古墳石室の推定前庭部にあたり大きく移動せずに遺存したとみられ、第2号古墳に伴うものであると考える。

(船越・有松)

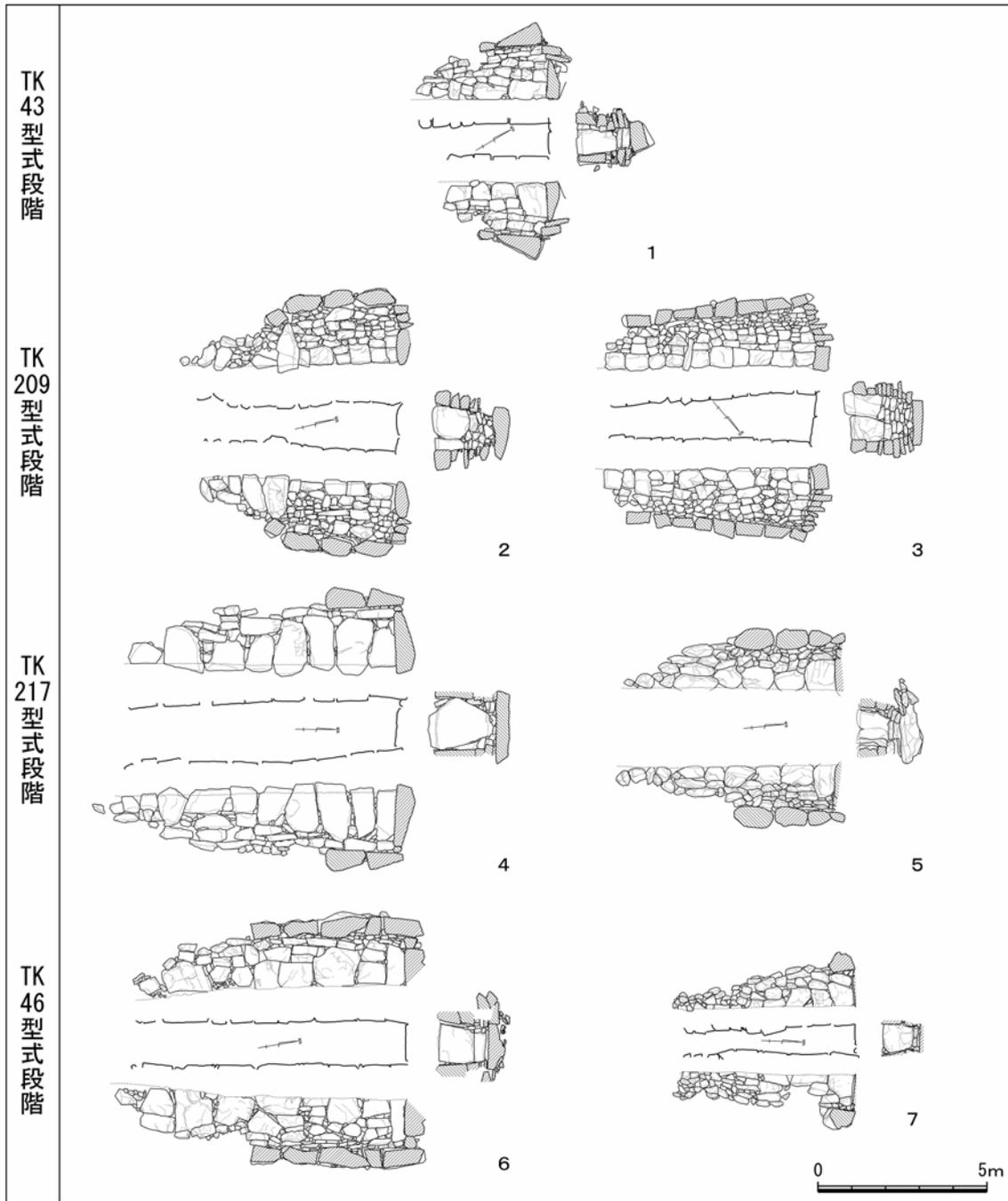
## 5. 備後北部地域における無袖横穴式石室の変遷

神石高原町猿ケ馬場第1号古墳の周辺には、多数の無袖横穴式石室が存在していた。しかしながら調査例はなく、崩壊してしまったものも多数であるため、現状では比較検討を行うことが困難である。そこで備後北部地域の無袖横穴式石室の変遷について確認し、猿ケ馬場第1号古墳の築造時期を推察したい。第7図は備後北部地域におけるTK43型式～TK46型式段階の無袖横穴式石室の変遷を示したものである。TK43型式段階では庄原市下重行第1号古墳(今井編2001)、TK209型式段階では庄原市梶平塚第2号古墳(梅本編1997)、三次市札幌古墳(唐口・鍛冶編2009)、神石高原町高塚山第2号古墳(辻編1987)、TK217型式段階では庄原市鬼橋野路古墳(佐古編1996)、三次市井手山古墳(恵谷1989)、三次市宮本古墳(岩本編1988)、世羅町池ノ奥古墳(梅本編2007)、世羅町亀ノ尾第1号古墳(辻編2000)、TK46型式段階では三次市四拾貫小原第16号古墳(中村ほか2017)、三次市門田敦盛第4号古墳(濱岡編2015)を取り上げた。追葬が行われた古墳については、初葬時のものと推測できる須恵器型式を基準とした。

**石材の大きさ** まず奥壁から確認する。TK43型式～TK209型式段階では、鏡石が奥壁1面を占める割合が4分の3以下であり、鏡石上段に石材を複数段積む。しかしながら、TK217型式段階以降では4分の3以上を占める。TK217型式段階の亀ノ尾第1号古墳の鏡石は奥壁のほとんどを占めるほか、鏡石の左右に石材を噛ませることで鏡石上端の高さで石材の面を揃えており、猿ケ馬場第1号古墳の特徴と類似している。

次に側壁である。鏡石と同様に腰石の大型化がみられるが、この傾向は奥壁よりも顕著である。TK43型式～TK209型式段階では側壁の高さの2分の1以下の腰石を用いるが、TK217型式段階以降では2分の1以上を占め、2段目以降に配置する石材にも大型化の傾向が窺える。なお石材に関連して、TK46型式段階では切石加工の石材を用いるという特徴がある。

**目地** TK43型式～TK209型式段階では明瞭な横目地と縦目地を確認できる。横目地を複数本通し、縦目地は玄室と羨道の境に通す。一方でTK217型式～TK46型式の段階にかけて不明瞭になり、横目地の数も最大でも1本に減少する。玄室と羨道の境の縦目地も確認できない。前項で確認した石材の大型化により、石室構築に必要な石材の数が減り、目地が減少する一因にもなったことが想定できる。



第7図 備後北部地域における無袖横穴式石室の変遷 (1/200)

1. 下重行第1号古墳 2. 高塚山第2号古墳 3. 梶平塚第2号古墳 4. 亀ノ尾第1号古墳  
 5. 鬼橋野路古墳 6. 四拾貫小原第16号古墳 7. 門田敦盛第4号古墳

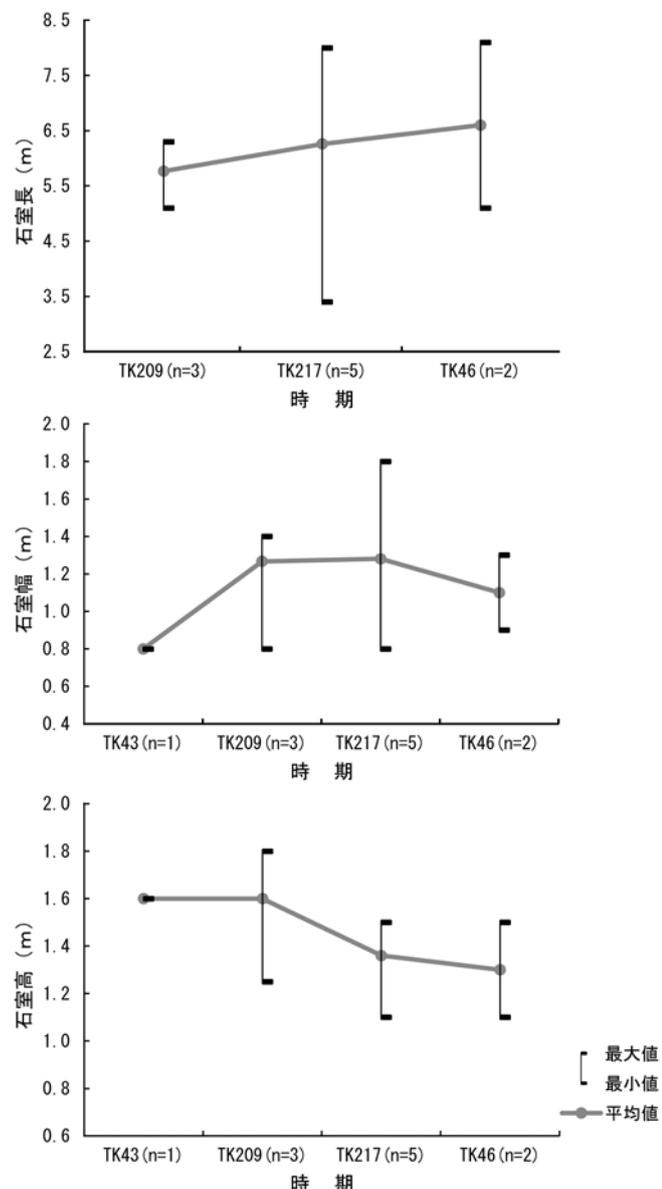
池ノ奥古墳では玄門立石を境に腰石をはじめとして石材の積み方に差異をつけることによって玄室と羨道の境を示しており、報告者である梅本健治氏は「古墳を構築した集団に羨道と玄室の区別が充分認識されていた」（梅本編2007）と指摘した。このような区別は下重行第1号古墳や梶平塚第2号古墳、高塚山第2号古墳、宮本古墳でも行われている。亀ノ尾第1号古墳では玄室では基底石を縦長に用いる一方で羨道では横長に用いており、玄室と羨

道を区別したといえる。一方で TK217型式段階以降の札場古墳や井手山古墳、鬼橋野路古墳、四拾貫小原第16号古墳、門田敦盛第4号古墳では玄室と羨道で石材の積み方に若干の差異はあっても明瞭な区別はない。玄室と羨道を区別する意識が次第に薄れていったことが窺える。

**石室規模**（第8図） まず平面形に着目する。TK43型式段階の下重行第1号古墳は全長が不明のため取り扱わなかった。全長はTK209型式段階で5.1～6.3m、TK217型式段階で3.4～8.0m、TK46型式段階で5.1～8.1mであり、時期が下るにつれて長くなる傾向がある。石室幅はTK43型式段階で約0.8m、TK209型式段階で0.8～1.4m、TK217型式段階で0.8～1.8m、TK46型式段階で0.9～1.3mであり、TK43型式～TK209型式段階にかけて広がり、TK46型式段階には狭まる。全長と石室幅の変化から、石室の長大化が窺える。

石室高はTK43型式段階が1.6m、TK209型式段階で1.3～1.8m、TK217型式段階で1.1～1.5m、TK46型式段階で1.1～1.5mであり、時期が下るにつれて徐々に低くなる。

**猿ヶ馬場第1号古墳の築造年代** 猿ヶ馬場第1号古墳は備後北部地域における無袖横穴式石室の変遷の中でどこに位置付けられるか。石室の特徴について再度概観する。石材の大きさは、腰石が4分の3以上を占めており、東西壁では石室高の約2分の1の高さまである石材を腰石として利用する。目地は横目地が1本と、縦目地は東西壁で玄室と羨道の境の1本のほか、玄室の西壁で作業段階のものとして1本を通す。石室規模は、全長6.4m、幅1.2～1.4m、石室高1.1～1.2mほどである。これらを備後北部地域における石室の変遷にあてはめると、石材の大きさと目地はTK217型式段階、石室規模はTK209型式～TK217型式段階に該当する。石室高はTK46型式段階と近似しているものの、猿ヶ馬場第1号古墳は割石を用いているため、切石加工が特徴であるTK46型式段階には当てはまらない。以上から、猿ヶ



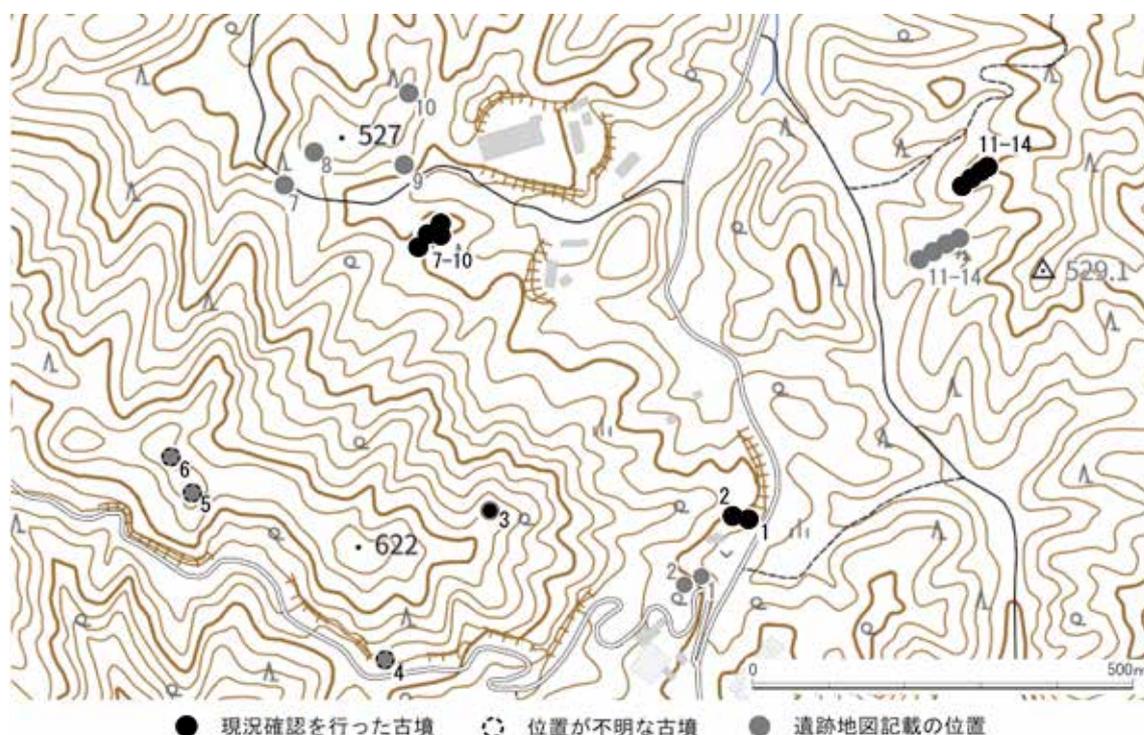
第8図 備後北部地域における無袖横穴式石室規模の変遷

馬場第1号古墳の石室についてTK209型式～TK217型式段階、特にTK217型式段階の石室との類似点を見出せる。一方で猿ケ馬場古墳群出土とされる須恵器は後述の通りTK43型式～TK209型式段階のものであり、時期のずれがあることから、伝出土須恵器は猿ケ馬場第1号古墳の副葬品ではなく既に崩壊したその他の古墳に伴うものである可能性が高い。したがって、猿ケ馬場古墳群はTK43型式～TK217型式段階の間に築造されたといえる。(船越)

## 6. 猿ケ馬場古墳群周辺における古墳の現況

### (1) 確認調査に至った経緯

猿ケ馬場古墳群周辺の現況を窺い知ることができるものは旧三和町が1998年に発刊した『郷土の古墳』(三和町文化財保護委員会編1998)のみである。ただし簡単な古墳の位置図や横穴式石室の略測図などが記載されているのみで、詳細な記述がなされているわけではない。そのため、猿ケ馬場第1・2号古墳の横穴式石室実測作業に並行して、周辺古墳群の現況確認を行った。さらに、中山四ツ塚古墳群出土馬具類の実測作業が進められていたことから、中山四ツ塚古墳群に赴いたところ、『郷土の古墳』記載の略測図にみられた石室はなく、ほぼ破壊された状況を確認した。またGPSにより、広島県遺跡地図とは異なる地点にあることも判明した。このため、広島県遺跡地図に記載された古墳位置と実際の古墳の位置、遺存状況を確認することとなった。調査実施日は2022年3月6日から3月13日および、2023年3月24日から2023年3月27日である。



第9図 現況確認を行った古墳 (1/10,000)

1. 猿ケ馬場第1号古墳 2. 猿ケ馬場第2号古墳 3. 相談谷東古墳 4. 相談谷南古墳 5. 相談谷第1号古墳  
6. 相談谷第2号古墳 7-10. 芸人山第1～4号古墳 11-14. 中山四ツ塚第1～4号古墳

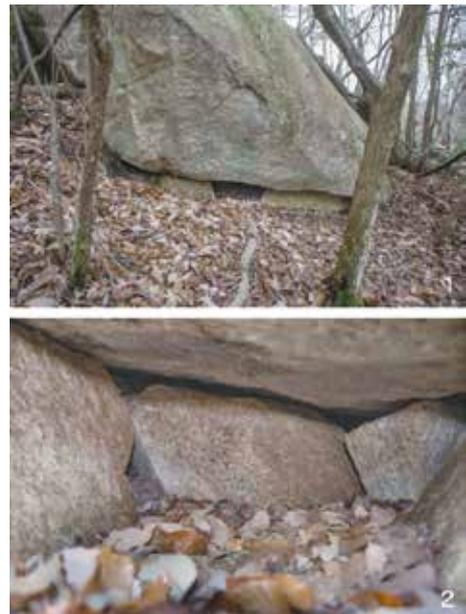
## (2) 現況確認を行った古墳群

対象の古墳群は『郷土の古墳』に石室略測図が記載され、比較的保存状況が良好と想定できる猿ケ馬場古墳群・相談谷古墳群・芸人山古墳群・中山四ツ塚古墳群である。また、相談谷古墳群へ向かう道中に位置する相談谷東古墳についても現地確認を行った。広島県遺跡地図（広島県教育委員会2000）と『郷土の古墳』に示された地点に赴き、まずそれらの古墳の位置が正確であるかを確認した。その地点に石室と推定できるものが確認できない場合は、周囲の探索を行った。遺跡地図記載地点に石室と推定できるものが確認できた場合、その位置をGPSで地図上にプロットした<sup>(3)</sup>。

**猿ケ馬場古墳群**（図版第9a、第9図） 広島県遺跡地図では、猿ケ馬場古墳群はかつて第1～9号古墳まで存在したとされる。しかし1997年の『郷土の古墳』によると、第3～5号古墳は開墾のため現存せず、第6号古墳は埋没し、第9号古墳に関しては転石のみ確認できたようである。実際に現況を確認したところ、第1・2号古墳は遺跡地図の地点からおおよそ北に120mほどずれた場所に位置することが判明した。しかし、第1号古墳以外は破壊されており、第2号古墳は天井石のみが露出し、第6～9号古墳については『郷土の古墳』で示された位置にはいくつか石材の石積みが散在するものの、石室の構造については判断できなかった。（図版第9a）。

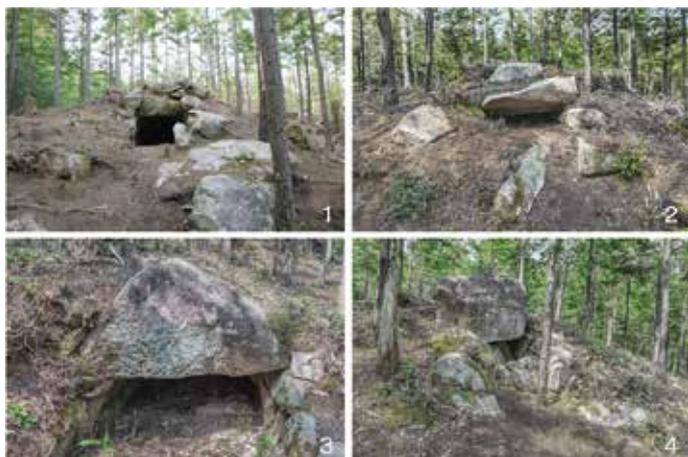
**相談谷古墳群**（第9図） 猿ケ馬場古墳群と同一丘陵の頂上付近に位置したとされる。距離にして猿ケ馬場古墳群から西へ750mほど離れている。『郷土の古墳』では、第1・2号古墳まで存在し、第1号古墳の横穴式石室は既に崩壊していたようだが、第2号古墳は片袖横穴式石室が遺存していたという。現況の確認のため、遺跡地図に示された地点へと赴いたが、古墳のマウンドや石室の石材と推定できるものはなかった。遺跡地図が不正確である可能性を考慮して周囲の探索を行ったが、古墳群の痕跡を示す石材等は確認できなかった。

**相談谷東古墳**（第9・10図） 猿ケ馬場古墳群と同一丘陵に所在し、丘陵頂部から北へ延びる尾根上に位置する。距離にして猿ケ馬場古墳群から西へ350mほど離れている。『郷土の古墳』には記載がなく、遺跡地図にのみ古墳の位置が示されているが、その概要については不明であった。現況の確認のため、遺跡地図で示された地点に赴くと石材がかなり散在していた。その中には、石材の面を揃えて配置し、その上に大型の石材を架構しているものが遺存した。内部は土砂で埋まっていたため詳細は不明であるが、人為的に石材が配置されていた。しかし、その周辺に古墳であると推定できるマウンドや石室の



第10図 相談谷東古墳石室状況

1. 相談谷東古墳石室外観（南東から）
2. 相談谷東古墳石室内状況



第11図 芸人山古墳群石室状況

1. 芸人山第1号古墳（南から） 2. 芸人山第2号古墳（南東から）  
3. 芸人山第3号古墳（南から） 4. 芸人山第4号古墳（南東から）

石材は確認できなかったため、当該地点を相談谷東古墳と判断した。**芸人山古墳群**（第9・11図）猿ケ馬場古墳群と同一丘陵の東側傾斜面にあたる尾根上に位置する。距離にして猿ケ馬場古墳群から北西に560mほど離れている。『郷土の古墳』には第1～4号古墳まで存在し、それぞれ南に開口する無袖横穴式石室が遺存しているとの記載がある。地権者の岡田由江氏ご夫妻に古墳群まで案内していただいたところ、遺跡地図に記載さ

れた位置から200mほど南にずれた地点に所在することが判明した。改めて遺跡地図に示された地点およびその周辺の探索を行ったが、そこには古墳と推定できるマウンドや石室の石材と考えることができるものは確認できなかった。よって、古墳群は遺跡地図に示された尾根ではなく、谷を1つ挟んだ南東側の尾根上に位置することが明らかとなった。また遺跡地図上の第1～4号古墳の位置関係は、互いに近接せず、ある程度距離があり、第1・2号古墳、第3・4号古墳がそれぞれ南北方向に並ぶ。しかし、実際には第1～4号古墳は東西方向に近接して並ぶような位置関係であった。

第1号古墳の石室規模は奥行きが6.3m、幅1.3m、高さ1.6mである。『郷土の古墳』に記載された値とほぼ一致する。天井石の1枚は大正11年に取り外され、日吉神社境内にある忠魂碑に利用された。三和町教育委員会が発行した『ふるさと』には、人力で蓋石を運ぶ当時の写真が掲載されており<sup>(4)</sup>、その写真のキャプションには「桑木地区の古墳の蓋石を高蓋小学校へ運び建立。昭和48年高蓋日吉神社境内へ移転」と記されている（高蓋公民館編1999）。日吉神社の忠魂碑は縦2.1m、横1.5mであり、当然ながら石室の規模と合致する。

第2号古墳の石室規模は奥行き5.1m、羨道幅（開口部付近）1.0mで、第3号古墳の石室は奥行きが4.0m、羨道幅（開口部付近）1.0mであるが、ほぼ埋没していた。第4号古墳の石室は奥行き5.9m、羨道幅（開口部付近）1.9mで、天井石が崩落していた。

**中山四ツ塚古墳群**（図版第9b、第9・12図）猿ケ馬場古墳群から北東に520mほど離れた丘陵の西側傾斜面にあたる尾根上に位置する。『郷土の古墳』によれば、第1～4号古墳まであり、それぞれ南に開口する無袖横穴式石室が遺存しているとのことであった。現況の確認のために遺跡地図に記載された地点へと赴いたが、その地点にはそれと思しきものは存在しなかった。そのため周辺を探索した結果、遺跡地図にて古墳群が示される尾根よりも谷を1つ挟んだ北側の尾根上に石室の一部とみられる石材が確認できた。よって、現状を把握するため周囲の清掃を行い、『郷土の古墳』掲載の写真・略測図を参考に、第1～4号古墳の

石室を推定復元した。なお、いずれの墳丘も削平されており、確認できなかった。

第1号古墳は、古墳群の中で最も西側かつ標高が低い地点に位置する。石室は石材が散在しているだけにすぎず、奥壁や側壁と断定できるものは確認できなかった。ただし、『郷土の古墳』記載の石室略測図2段目の大きな隅丸石材と、推定羨門開口部付近に面が揃っている石材が確認できた。



第12図 中山四ツ塚古墳群石室状況

1. 中山四ツ塚第1号古墳（南東から） 2. 中山四ツ塚第2号古墳（北西から） 3. 中山四ツ塚第3号古墳（南から） 4. 中山四ツ塚第4号古墳（北西から）

第2号古墳は西から2番目、第

1号古墳の東隣に位置する。北側には埋没しているため正確な高さは不明であるが、1m以上の規模をもつ奥壁の鏡石が確認できる。推定側壁箇所は東西壁ともに原位置に近い石材とみられるものが面を揃え、抜け落ちつつも南へ連なっている。石室の幅は最も南側で0.8m、奥壁付近では1.4mであった。推定の奥行きは7.6mで『郷土の古墳』の記載と一致する。

第3号古墳は西から3番目、第2号古墳の東隣に位置する。鏡石と推定できる石材は認められず、推定西壁の石材は1石のみ確認できるが、本来の位置ではないと考える。一方、東壁は直線上に並ぶ3石が原位置に近いと考えることができる。さらに、これらよりも南側には、西側の面が揃った石材が遺存していた。この1石を含めると推定の奥行きは5.8mであるが、『郷土の古墳』の値は5.25mとなっている。

第4号古墳は古墳群の中で最も標高が高く、西から4番目、第3号古墳の東隣に位置する。平滑に割られた面を南に向け、斜めに配置された石が石列最南端に存在するため、ここが推定羨門開口部と考える（図版第9b）。石材は原位置を留めていないが、その転落状況から上下に2石配置していたと推測できる奥壁が確認できた。以上から、奥行きは推定で5.5mになり、『郷土の古墳』の記載と同様の大きさになる。

第1～4号古墳の開口方向について、第1号古墳は残存状況が悪く不明であるが、第2号古墳と第3・4号古墳でわずかに異なる。第2号古墳が南東方向に、第3・4号古墳は南南東方向に開口すると復元できる。『郷土の古墳』に掲載された石室略測図よりも崩壊が進んでいる要因として、古墳群が位置する尾根の北側斜面には植林が行われていることから、植林の際に石室が「撤去」されたものかも知れない。

以上の調査から、広島県遺跡地図の古墳の位置が不正確であったようだ。広島県遺跡地図と本調査の結果を比較すると、同一方向、同一距離に一斉にずれているわけではなく、尾根や古墳間の距離がそれぞれ異なっていることが判明した。また、『郷土の古墳』掲載の位置図は縮尺がなく簡易的なものであるが、今回の調査で得られた位置とおおよそ同じ地点を示

第1表 周辺古墳群の水平位置座標

古墳名	北緯	東経
猿ヶ馬場第1号古墳	34°39' 13.8"	133°13' 14.6"
猿ヶ馬場第2号古墳	34°39' 13.8"	133°13' 14.1"
相談谷東古墳	34°39' 14.9"	133°13' 00.7"
相談谷南古墳	不明	不明
相談谷第1号古墳	不明	不明
相談谷第2号古墳	不明	不明
芸人山第1号古墳	34°39' 25.7"	133°12' 57.4"
芸人山第2号古墳	34°39' 26.0"	133°12' 57.6"
芸人山第3号古墳	34°39' 25.7"	133°12' 58.2"
芸人山第4号古墳	34°39' 26.2"	133°12' 58.6"
中山四ツ塚第1号古墳	34°39' 28.0"	133°13' 25.9"
中山四ツ塚第2号古墳	34°39' 28.1"	133°13' 25.8"
中山四ツ塚第3号古墳	34°39' 28.3"	133°13' 26.2"
中山四ツ塚第4号古墳	34°39' 28.5"	133°13' 26.5"

していた。しかし、『郷土の古墳』掲載の石室略測図よりも崩壊が進んでいるものが多かった。『郷土の古墳』は1998年に発行されたものであるため、中山四ツ塚古墳群などはそれ以降に崩壊・消滅してしまったと想定できる。残念というほかない。(宇野・竹田)

## 7. 猿ヶ馬場古墳群出土の須恵器

測量調査中に猿ヶ馬場第2号古墳の推

定前庭部付近にて須恵器平瓶（図版第13b-36、SBB54）の破片1点を表採した。猿ヶ馬場古墳群の中で唯一石室との対応関係がわかる資料である。このほか神石高原町立歴史民俗資料館に所蔵されていた猿ヶ馬場古墳群の出土遺物は須恵器坏蓋8点、須恵器坏身10点、須恵器高坏1点、須恵器提瓶1点、須恵器平瓶1点、須恵器甕13点、平瓦1点である。以下では、出土遺物の詳細について述べる。

(1) 須恵器（図版第10～13、第13・14図〈神石高原町立歴史民俗資料館所蔵〉）

坏蓋（1～7、14） 坏蓋は全て天井部と口縁部の境に明瞭な稜はない。ただし、天井部に施される回転ヘラケズリの有無によって大別できる。

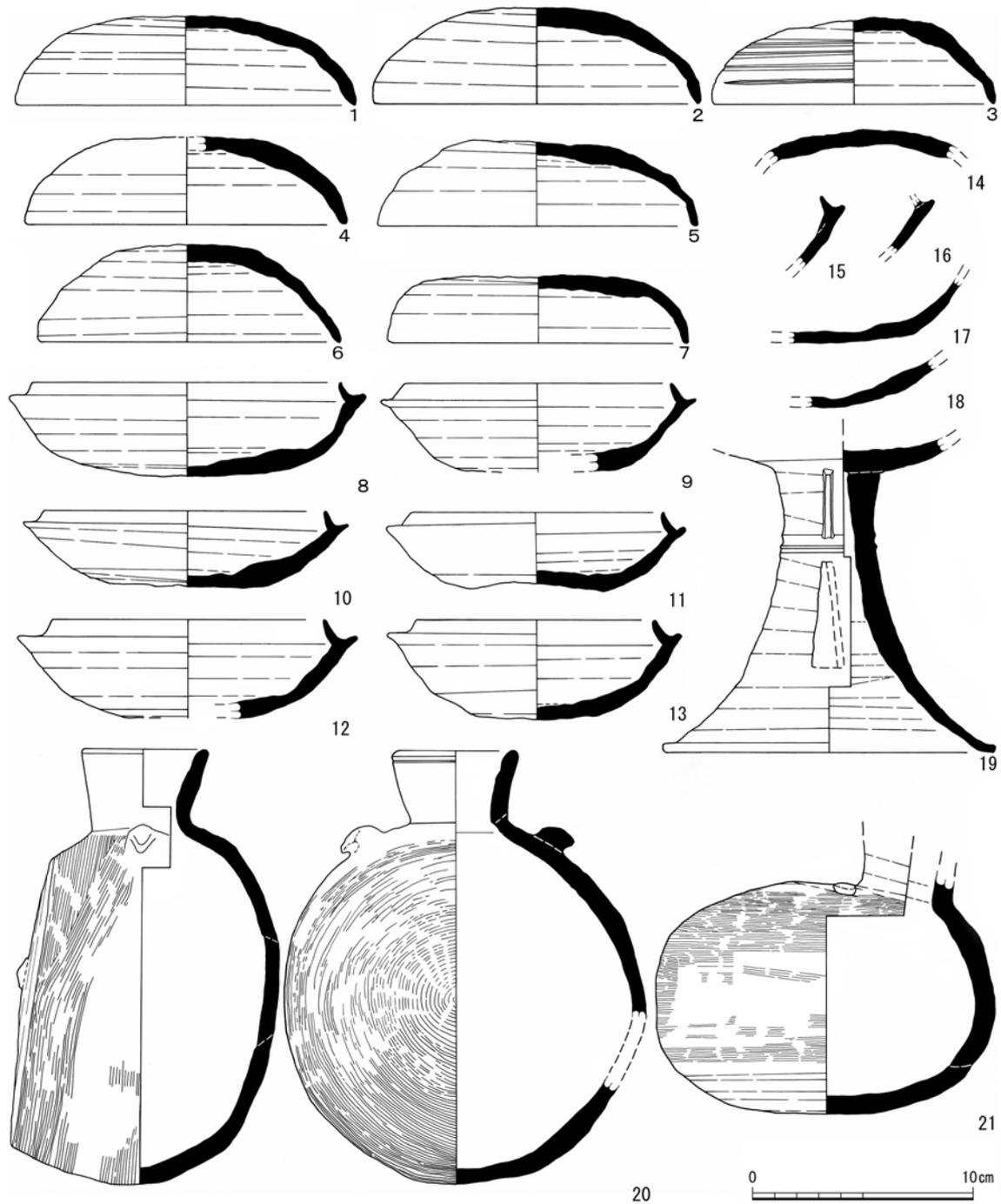
1は天井部の約3分の1にかけて内から外に反時計回りの回転ヘラケズリを施し、口縁部外面と内面全体には反時計回りの回転ナデを行う。肩部上部には他の部分より強くナデたことによる幅広い凹線状の窪みが1周する。粘土紐接合痕跡は不明瞭だが、内から外へ時計回りに巻き上げて成形する。2mm以下の砂粒を含んだ緻密な胎土を使用し、焼成はやや良好である。2の天井部はヘラ切り後に内から外に反時計回りの回転ヘラケズリを施すが、ヘラ切り痕が明瞭に残る。粘土紐は内から外に時計回りに巻き上げて成形する。3mm以下の砂粒を含んだやや緻密な胎土を使用し、焼成はやや良好である。3の天井部は回転ヘラ切り後にアラナデをして整形するが、ヘラ切り痕が明瞭に残る。口縁部外面と内面全体は反時計回りの回転ナデを行う。肩部上部には強くナデたことによる幅広い凹線状の窪みが3周する。また、口縁部内面には緩く段を形作る。粘土紐接合痕跡は不明瞭である。3mm以下の砂粒を含んだ緻密な胎土を使用し、焼成はやや良好である。4の天井部は回転ヘラ切り後未調整であり、口縁部外面と内面全体には内から外に反時計回りの回転ナデを行う。粘土紐接合痕跡は不明瞭である。2mm以下の砂粒を含む緻密な胎土を使用し、焼成はやや良好である。5は焼け歪みのため、器形が大きく歪んでいる。天井部の約3分の1にかけて内から外に反時計回りの回転ヘラケズリを施し、口縁部外面と内面全体には内から外に反時計回りの回転ナデを行う。肩部上部には他の部分より強くナデたことによる幅広い凹線状の窪みが2周する。また、口縁部内面には緩く段を形作る。粘土紐は内から外に時計回りに巻き上げて成形する。2mm以下の砂粒を含む緻密な胎土を使用し、焼成は良好である。6の約3分の1は回転ヘラ切り後

にアラナデをして整形をしている。口縁部外面と内面全体には反時計回りの回転ナデを行い、外面には強くナデたことによる幅広い凹線状の窪みが4周する。粘土紐接合痕跡は不明瞭だが、内から外へ時計回りに巻き上げて成形する。1mm以下の砂粒を含んだ緻密な胎土を使用し、焼成はやや良好である。7の天井部は回転ヘラ切り後にアラナデをして整形するが、ヘラ切り痕が明瞭に残る。口縁部内外面は内から外に反時計回りの回転ナデを行うが、天井部内面のナデは乱雑に行われている。粘土紐は内から外に巻き上げて成形する。3mm以下の砂粒を多く含む胎土を使用し、焼成は良好である。14は天井部のみが残存している。天井部は回転ヘラ切り後にアラナデをして整形するが、ヘラ切り痕が残る。粘土紐接合痕跡は不明瞭である。2mm以下の砂粒を多く含むやや緻密な胎土を使用し、焼成はあまり良くない。

**坏身 (8~13、15~18)** 坏身は全て立ち上がりやや内湾して先細り気味に丸くおさめ、受部は短く外方へのびているが、受部端部のおさめ方に違いが見られる。8・11~13・15・16は受部端部を丸くおさめ、9・10は先細り気味に丸くおさめる。体部と立ち上がりの境には強くナデたことによる凹線状の窪みが1周する。

8は内外面に反時計回りの回転ナデを施す。粘土紐接合痕跡は不明瞭だが、内から外に時計回りに巻き上げて成形する。1mm以下の砂粒を含む緻密な胎土を使用し、焼成は良好である。9は内外面に反時計回りの回転ナデを施す。粘土紐は内から外に時計回りに巻き上げて成形する。2mm以下の砂粒を含む緻密な胎土を使用し、焼成は良好である。10は底部外面の約2分の1に内から外に反時計回りの回転ヘラケズリを施し、口縁部外面と内面全体に反時計回りの回転ナデを行う。粘土紐接合痕跡は不明瞭である。2mm以下の砂粒を含む緻密な胎土を使用し、焼成はやや良好で所々に気泡による膨張が見られる。11の底部外面は回転ヘラ切り後未調整である。粘土紐は内から外に時計回りに巻き上げて成形する。2mm以下の砂粒を含む緻密な胎土を使用し、焼成は良好である。12は底部外面の約3分の1は内から外に反時計回りの回転ヘラケズリを施し、口縁部外面と内面全体は反時計回りの回転ナデを行う。粘土紐接合痕跡は不明瞭である。2mm以下の砂粒を含む緻密な胎土を使用し、焼成は良好であるが、やや焼け歪みが生じている。13は焼け歪みのため、器形が大きく歪んでいる。底部外面の約3分の1は内から外に反時計回りの回転ヘラケズリを行い、口縁部外面と内面全体は反時計回りの回転ナデを施す。粘土紐接合痕跡は不明瞭だが、内から外に時計回りに巻き上げて成形する。2mm以下の砂粒を含む緻密な胎土を使用し、焼成は良好である。外面には自然釉が付着している。15は坏身の口縁部のみが残存している。2mm以下の砂粒を含む緻密な胎土を使用し、焼成は良好である。16は細片のため全形は不明である。2mm以下の砂粒を含むやや緻密な胎土を使用し、焼成はあまり良くない。17は坏身の底部と考えるが細片のため全形は不明である。内外面ともに反時計回りの回転ナデを行う。3mm以下の砂粒を含む緻密な胎土を使用し、焼成は良好である。18は坏身の底部と考えるが細片のため全形は不明である。内外面ともに反時計回りの回転ナデを行う。2mm以下の砂粒を含む緻密な胎土を使用し、焼成は良好である。外面には自然釉が付着している。

**高坏 (19)** 坏部の底部と脚部の約4分の1が残存している。残存する坏部の底部上半に



第13図 伝猿ヶ馬場古墳群出土遺物実測図1 (1/3)

は回転ヘラケズリを施す。坏部の底部下半から脚部にかけては回転ナデ調整を行い、底部から脚部上部の約3分の1は強いナデである。坏部の底部外面には粘土紐接合痕跡が残る。脚部は長脚で透孔を2段、3方向に入れる。上段の透孔は方形透孔であり、下段の透孔は欠損しているが残存部分から方形透孔が想定できる。上下の透孔の間には2本の沈線が入る。

**提 瓶 (20)** 口縁部端部は漏斗状に仕上げ、体部上部の両側には鉤状の把手が付く。体部

前面には内から外に反時計回りに1 cmあたり9～10本程度の回転カキメを施す。内面は回転ナデである。粘土紐巻き上げにより成形しており、内面の回転ナデを行った後に粘土板によって塞いでいる。この粘土板の外面にも内から外に反時計回りの回転カキメを施す。頸部は内外面ともにナデにより仕上げる。頸部と体部を接合するため、頸部には強くナデた痕跡が残っている。2 mm以下の砂粒を含む緻密な胎土を使用し、焼成は良好である。体部前面には自然釉が付着しており、内面にも一部流れ込んでいる。

**平 瓶** (21・36) 21は全体的に丸みを帯びた形態である。体部上には円形粘土粒が貼り付ける。体部には反時計回りに1 cmあたり10～11本程度の回転カキメを施す。内面は回転ナデである。粘土紐巻き上げにより成形しており、内面のナデを行ったあとに底部を粘土板によって塞いでいる。この粘土板には反時計回りの回転ナデを施す。口頸部と体部を接合するため、頸部にはナデた痕跡が残っている。2 mm以下の砂粒を含む緻密な胎土を使用し、焼成は良好である。36は細片であり全形は不明であるものの、器壁の厚さや、内面に自然釉の付着がみられることから平瓶の体部であると考えられる。内外面ともに回転ナデを施す。

**甕** (22～34) 22・23・24は肩部、25～34は胴部の破片と考える。全ての外面にはタタキを施しており、26・30は平行タタキ、それ以外は格子目タタキである。内面には全て円弧状の当て具痕を残しているが、ナデ消している。

22はタタキのあとカキメを施してからナデ消している。1 mm以下の砂粒を含む緻密な胎土を使用し、焼成は良好である。23の外面はタタキのあとナデ消している。1 mm以下の砂粒を含む緻密な胎土を使用し、焼成は良好である。24の外面はタタキのあとナデ消している。0.5 mm以下の砂粒を含む緻密な胎土を使用し、焼成は良好である。25の外面はタタキのあと全面をナデ消している。2 mm以下の砂粒を含むやや粗な胎土を使用し、焼成はやや良好である。26の外面はタタキのあと全面をナデ消している。1 mm以下の砂粒を含む緻密な胎土を使用し、焼成は良好である。外面の凹部には自然釉が付着している。27の外面はタタキのあとカキメを施してからナデ消している。1 mm以下の砂粒を含む緻密な胎土を使用し、焼成は良好である。28の外面はタタキのあとカキメを施してからナデ消している。1 mm以下の砂粒を含む緻密な胎土を使用し、焼成は良好である。29の外面はタタキのあと全面をナデ消している。2 mm以下の砂粒を含むやや緻密な胎土を使用し、焼成は良好である。30の外面はタタキのあとナデ消している。3 mm以下の砂粒を含む緻密な胎土を使用し、焼成は良好である。31の外面はタタキのあとナデ消している。0.5 mm以下の砂粒を含む緻密な胎土を使用し、焼成は良好である。32の外面はタタキのあとナデ消している。1 mm以下の砂粒を含む緻密な胎土を使用し、焼成はやや良好である。33の外面はタタキのあとナデ消している。2 mm以下の砂粒を含むやや緻密な胎土を使用し、焼成はやや良好である。34の外面はタタキのあと全面をナデ消している。1 mm以下の砂粒を含むやや緻密な胎土を使用し、焼成はやや良好である。

(2) そのほか (図版第13、第15図〈神石高原町立歴史民俗資料館所蔵〉)

**平 瓦** (35) 凸面は斜格子圧痕、凹面には布目圧痕を施す。凸面の叩き板は復元できないものの、1個あたり0.9 cm×1.1 cmほどの斜格子が5 cmの幅に3列配される。凹面は布目圧痕



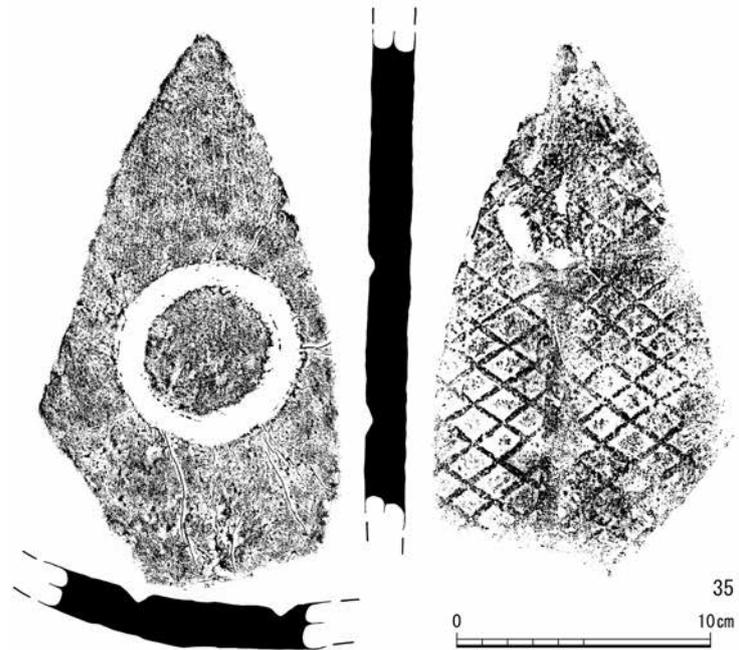
第14図 伝猿ヶ馬場古墳群出土遺物実測図2 (1/3)

であり、縦糸19～21本 / 2 cm×横糸16本 / 2 cmの糸目の細かい布を使用している。模骨痕が見られないことや、湾曲が弱いことなどから一枚作りであると考え。焼成は須恵質である。凹面には、採集者の関係者が一輪挿しを乗せるために加工した円形の窪みがある。

### (3) 須恵器の年代

ここでは、田辺昭三氏による須恵器編年（田辺1966、1981）を主に参照する。坏蓋の1・

2は口径が14cmほどと大きいものの、天井部と口縁部の境の稜や口縁部端部内面の段が完全に消失していることからTK43型式段階にあたるといえる。一方で3～7は口径が12.6～13.3cmと比較的小さく、TK209型式段階である。坏身の8は復元口径が14.0cmと若干大きい、立ち上がりの高さや角度が低くなっており、TK43型式段階にあたる。9～13の口径は11.0～12.8cmで比較的小さく、坏身の立ち上がりの高さや角度が低いこ



第15図 伝猿ヶ馬場古墳群出土遺物実測図3 (1/2)

とから、TK209型式段階にあてはまる。また、15は口縁部のみの資料であるが、立ち上がりの高さが低く角度は浅くなっており、TK209型式段階以降にあたるといえる。高坏(19)は坏部が残存していないものの、脚部は長脚で3方向の方形透孔を2段入れており、TK209型式段階にあたる。提瓶(20)は口縁部が漏斗状であり、肩部には鉤形の吊り手が付いているが、吊り手はやや退化して小さくなっており、TK209型式段階にあたる。平瓶のうち、21は全体的に丸みのある形状をして漏斗状の口縁部を持つこと、さらに口頸部が体部の一方へ寄った位置についていることから、TK217型式段階にあたる。36は細片であり全体的な特徴は不明だが、平瓶の出現はTK209型式以降とされている。

以上のようにTK209型式段階を中心として、TK43型式～TK217型式段階の特徴をもつ須恵器が確認できた。時期幅があることから猿ヶ馬場古墳群のなかでも複数の古墳から出土したことも想定できるが、測量調査中に表採した平瓶(図版第8b、第13b-36、SBB54)を除いて出土位置は不明であり、追葬の可能性もあるため詳細な検討は行えない。(船越)

## 8. 中山四ツ塚古墳群出土馬具について(図版第14、第16・17図)

### (1) 中山四ツ塚古墳群出土馬具の概要

中山四ツ塚古墳群出土とされる1組の瓢形環状鏡板付轡と2組の鍔金具を紹介する。現在、本資料は、「府中高校考古資料」として広島県立歴史博物館で保管されている。「府中高校考古資料」とは、広島県立府中高等学校地歴部で保管されていた膨大な考古資料であり、2014年度に広島県立歴史博物館へ全て寄贈された。

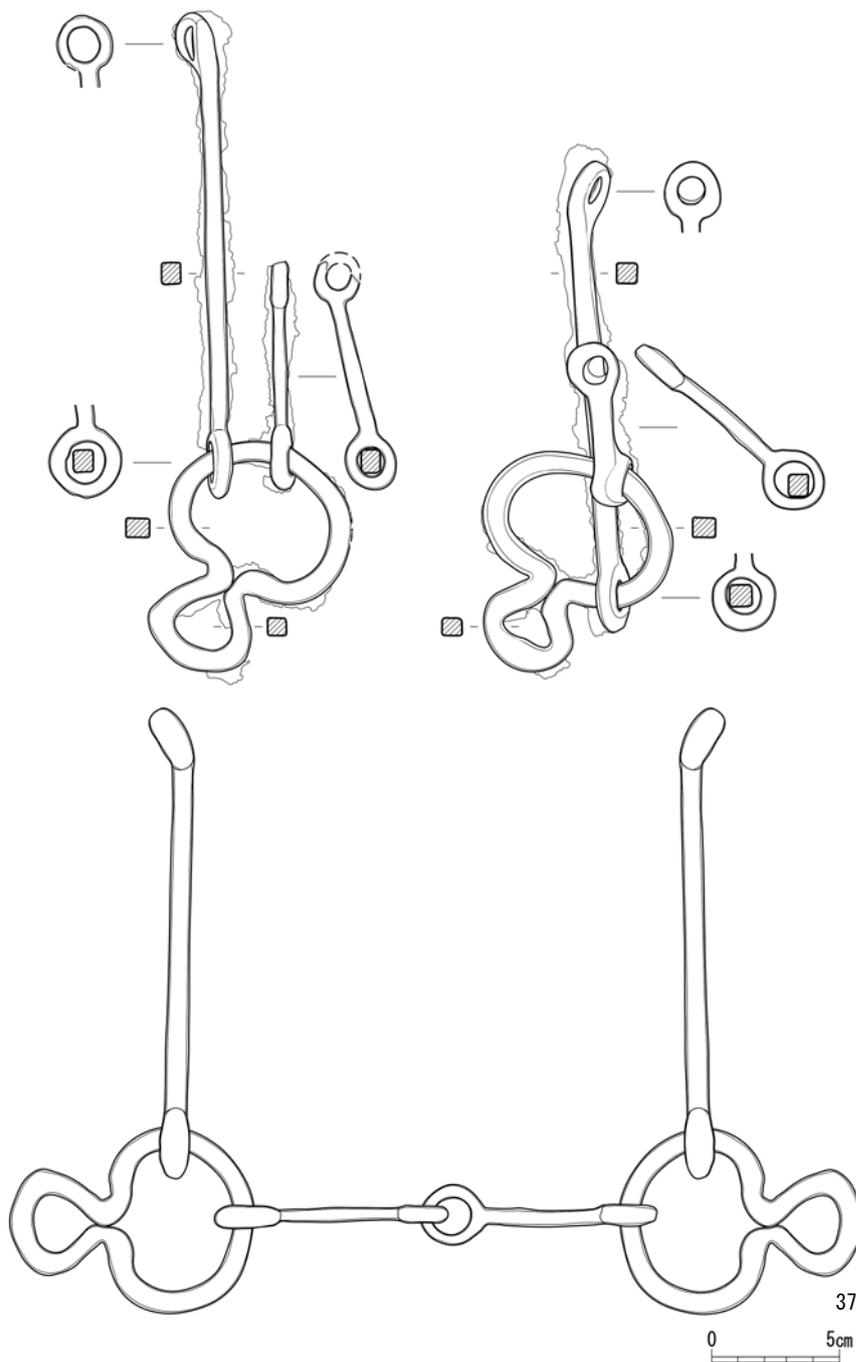
本資料は、標本箱の中に「中山四ツ塚古墳群」と書かれた紙ラベルと一緒に入れられていた。地歴部は、部誌などで資料紹介を多数行っているが、残念ながら、本資料に関する資料

紹介はない。唯一、1980年に発行された部誌である『地歴』第8号の「府中高校所蔵考古資料（県内出土）目録」に本資料も挙げられているが、中山四ツ塚古墳群より出土、出土古墳不詳とだけ記載されており（脇坂 1980）、それ以上の情報は不明である。

(2) 瓢形環状鏡板付轡（図版第14a、第16図）

環体の一部を屈曲させて立間を作り出した、瓢形環状鏡板付轡である。全体的に銹化とクラックが激しい。鏡板は0.8~1.0cm角の断面隅丸方形の鉄棒を用い、立間部分で曲げた鉄棒

の両端部を鍛接したと考える。右鏡板は立間も含めた全長9.1cm、最大幅7.7cm、左鏡板は同全長9.5cm、最大幅7.4cmを測る。銜は二連式で、右鏡板に完形で残る1本の長さが9.3cmであり、銜全体の推定全長は18.6cm前後と考える。引手は手綱側を「く」の字に曲げている。右引手が長さ18.7cm、左引手が長さ19.2cmを測る。銜・引手とも断面隅丸方形の鉄棒を用い、環はいずれも鍛接している。連結方法は、鏡板に銜先環と引手の環を連結させる鏡板介在型連結（大谷2008）である。



第16図 中山四ツ塚古墳群内出土轡実測図・復元図 (1/3)

(3) 鍔金具 (絞具・兵庫鎖・吊手金具)  
(図版第14b、第17図)

2組の鍔金具があり、絞具、兵庫鎖、吊手金具で構成される。三角錐形壺鍔の構成金具と推定されるが、全体的に銹化とクラックが激しい。絞具は全長10.0cm前後である。兵庫鎖は三連で、幅約0.7cmを測る断面隅丸方形の鉄棒を折り曲げた全長9.0cm前後の環を繋げている。吊手金具は兵庫鎖との連結部分を除いて欠損している。第17図左側の吊手金具には銚が二か所残存しているが、本来の全長や銚数等は不明である。

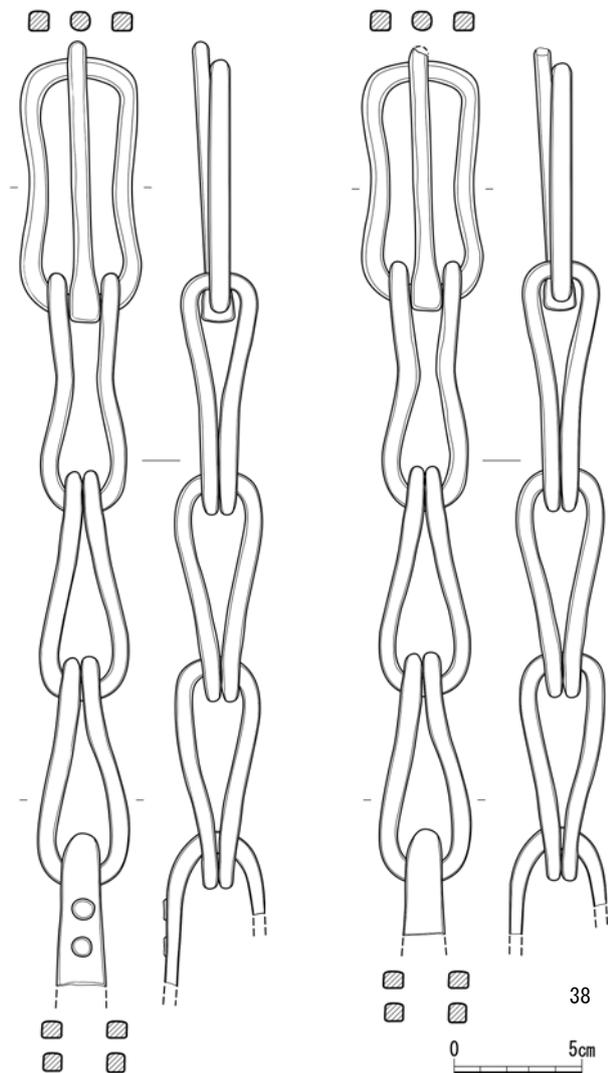
(4) 馬具の特徴と年代

大谷氏の研究によると、瓢形環状鏡板付轡はTK10型式段階に出現し、TK43型式～TK209型式段階で盛行、TK217型式段階に衰退する。そして、鏡板に銜先環と引手の環を連結させる鏡板介在型連結はTK10型式段階から存在し、銜先環に鏡板と引手を連結させる銜介在型連結は、TK43型式段階に出現する。さらに、TK209型式段階以降は鏡板の小型化(全長8.0cm以下)や鉄棒を曲げただけで鍛接を行わない環を持つ蕨手引手の出現を編年指標として挙げ、製作における簡略化・小型化が進行することを指摘している(大谷2008)。

また、尾上氏は、三角錐形壺鍔を分類し、A群(吊手金具の長さ15.0cm以上、兵庫鎖は三連式および多連式)をTK10型式～TK43型式段階、B群(吊手金具の長さ12.0～13.0cm前後、兵庫鎖は三連式)をTK43型式～TK209型式段階、C群(吊手金具8.0～10.0cm、兵庫鎖は二連式)TK217型式段階に比定し、金具が次第に簡略化・省略化することを指摘している(尾上2002)。

以上の先行研究による編年観を参考にすると、中山四ツ塚古墳群の瓢形環状鏡板付轡は全長9.0cm以上、鏡板介在型連結、環を鍛接した「く」の字形の引手であることや、鍔金具の兵庫鎖は三連式であることから、TK10型式～TK209型式段階に位置づけられる。

管見では、広島県内において、瓢形環状鏡板付轡は中山四ツ塚古墳群のほかに3古墳で出土している(東広島市蛇迫山古墳、三原市銭神第4号古墳、神石高原町高蓋塚谷古墳)。中



第17図 中山四ツ塚古墳群内出土鍔金具実測図 (1/3)

山四ツ塚古墳群から北西へ約4.5kmに位置する高蓋塚谷古墳では、鏡板介在型連結と銜介在型連結の2組の瓢形環状鏡板付轡、1組の三角錐形壺鐙の鐙金具（絞具、兵庫鎖、吊手金具）が見つかっており、共伴する須恵器の年代観も合わせてTK43型式～TK209型式段階に位置づけられている（野島・森本ほか2020）。瓢形環状鏡板付轡が「く」の字形の引手であることや鐙金具の兵庫鎖が三連式であることなど、中山四ツ塚古墳群出土本例と類似した馬具構成である。（森本）

## 9. おわりに

今回の測量調査によって、猿ケ馬場第1号古墳の無袖横穴式石室がTK209型式～TK217型式段階に築造されたと想定することができた。だがしかし、古墳群出土とされた須恵器の多くはTK43型式～TK209型式段階に属しており、若干古い様相を呈していた。崩壊した他の猿ケ馬場古墳群から出土した可能性も捨てきれない。他の古墳群は猿ケ馬場第1号古墳よりも前に築造されていたとすることもできよう。高蓋塚谷古墳同様、瓢形環状鏡板付轡の出土は吉備地域での共通性をみることができる。高蓋塚谷古墳の紹介において明らかにしたように、当該地域の古墳群の特徴の一端を示すものとみておきたい。

上述したように、相談谷古墳群、相談谷東古墳、芸人山古墳群、中山四ツ塚古墳群など、猿ケ馬場古墳群の周囲の山塊尾根に立地していた古墳群の現存状況を確認するための踏査も行ったが、1980年代まで遺存していた上記古墳群も、横穴式石室を構成する石材はことごとく取り去られ、崩壊あるいは消滅していた。残念ながら石室が崩壊・滅失していない古墳は猿ケ馬場第1号古墳と芸人山古墳群のみであることが判明した。当該地域には無袖横穴式石室が集中しており、一定の職能集団を想定できるケーススタディともなりえた。備後国府にも隣接しており、芦田郡北端の当該地域は森林資源や鉄資源を供給する柚としての機能をすでに有していたと想像することもできることから残念というほかない。

しかし、神石高原町高蓋ふれあい交流施設、および広島県立歴史博物館に所蔵されていた関連資料から、これまで注目されてこなかった神石高原町高蓋地区の古墳文化についての知見をふやすことができた。今後は広島県・神石高原町の文化財保護行政により、現在まで遺存した猿ケ馬場第1号古墳や芸人山古墳群の現地保存を講じていただくことを切に願いたい。

最後に高蓋塚谷古墳出土遺物の紹介（野島・森本・藤澤・下江2020）から引き続き、広島県立歴史博物館のご協力により、これまで公開されてはいなかった豊元國氏収集の馬具の実測図を掲載させていただくことができた。また、神石高原町教育委員会教育課川上翔太郎氏および地権者の今川仁志氏には格別のご配慮・ご協力を賜った。ともに記して感謝したい。

なお、今回の資料紹介は2021年度大学院人間社会科学研究科・文学部考古学研究室の野外考古学実習授業（野外考古学実習C）での墳丘測量と石室実測、写真撮影をもととし、遺物実測などについては神石高原町委託研究費（研究代表：野島 永）を使用した。野島・有松の指導のもと、実習授業に参加した学部4年次生の舩越雅子が中心的な作業を担った。第1・

2・9節は野島と有松、第3・4・5・7節は舩越、第6節は宇野と竹田、第8節は森本がおもに執筆し、野島・有松が協議して全体の文体を調整した。(野島・有松)

## 註

- (1) 2020(令和2)年10月29日、高蓋ふれあい交流施設において、神石高原町教育委員会教育課教育係長立原耕一氏、同教育課主任主事川上翔太郎氏の立会いのもと、広島大学大学院人間社会科学研究科教授野島永、准教授有松唯、大学学部生宇野真太郎・竹田千紘・岸戸康記が遺物の梱包、運搬を行い、広島大学文学部考古学研究室に搬入し、実測・写真撮影をおこなった。
- (2) 新型コロナウイルスの第5次感染(第5波)が一段落した、2022(令和4)年3月6日から3月13日まで、猿ヶ馬場古墳群に赴き、第1号古墳および第2号古墳の構築状況を確認し、2021年度考古学野外実習授業(野外考古学実習C)として、横穴式石室の実測と周辺地形の測量調査を行った。参加者については以下の通りである。  
広島大学学部生：宇野真太郎・竹田千紘・岸戸康記・高田美玖・舩越雅子・長崎 駿・村上未紗
- (3) 調査時の記録は keiziweb 社の「Geographica」というアプリケーションを用いた。
- (4) 芸人山古墳群の土地所有者、岡田由江氏ご夫妻から教えて頂いた。

## 引用・参考文献

- 今井隆行編 2001 『下重行第1号古墳』庄原市文化財調査報告書12、庄原市教育委員会。
- 岩本芳幸編 1988 『宮本古墳』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第71集、広島県埋蔵文化財センター。
- 梅本健治編 1997 『梶平塚第2号古墳発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財センター調査報告書第150集、広島県埋蔵文化財調査センター。
- 梅本健治編 2007 『池ノ奥古墳』中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告3、広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室。
- 恵谷泰典 1989 『井手山古墳』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第76集、広島県埋蔵文化財調査センター。
- 大谷宏治 2008 「瓢形環状鏡板付轡の特質」『静岡県考古学研究』40号、静岡県考古学会、201～214頁。
- 尾上元規 2002 「壺鏡と瓢形円環轡について」『環瀬戸内海の考古学—平井勝氏追悼論文集—』下巻、古代古備研究会、333～340頁。
- 唐口勉三・鍛冶益生編 2009 『札場古墳・大平遺跡・後山大平古墳』中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(7)、広島県教育事業団発掘調査報告書第26集、広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室。
- 佐古辰巳編 1996 『鬼橋野路古墳発掘調査報告書』東城町埋蔵文化財発掘調査報告書第3集、東城町教育委員会。
- 三和町文化財保護委員会編 1998 『郷土の古墳』三和町教育委員会。
- 高蓋公民館編 1999 『ふるさと—三和町昔の写真集—』三和町教育委員会。
- 田辺昭三 1966 『陶邑古窯址群』I、平安学園考古学クラブ。
- 田辺昭三 1981 『須恵器大成』角川書店。
- 辻 満久編 1987 『高塚山第1・2号古墳発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第64集、広島県埋蔵文化財センター。
- 辻 満久編 2000 『亀ノ尾第1号古墳発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第189集、

広島県埋蔵文化財センター。

中村芳昭・桑原隆博・加藤光臣 2017 『四拾貫小原第16号古墳・下山南遺跡発掘調査報告書』広島県三次市文化財調査報告書第10集、三次市教育委員会・特定非営利活動法人広島文化財センター。

野島 永・森本直人・藤澤昌弘・下江裕貴 2020 「広島県神石高原町高蓋塚谷古墳の紹介」『広島大学大学院文学研究科 考古学研究室紀要』第11号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、53～72頁。

濱岡大輔編 2015 『門田敦盛第2・3・4号古墳』広島県三次市文化財調査報告書第8集、特定非営利活動法人広島文化財センター。

広島県教育委員会 2000 『広島県遺跡地図Ⅶ（福山市・府中市・沼隈郡・深安郡・芦名郡・神石郡）』広島県教育委員会。

宮崎泰史・藤永正明 2006 『年代のものさし－陶邑の須恵器－』大阪府立近つ飛鳥博物館。

脇坂光彦 1980 「府中高校所蔵考古資料（県内出土）目録（付・府中高校所蔵資料の紹介⑩～⑭）」『地歴』第8号、広島県立府中高等学校生徒会地歴部、1～5頁。

第2表 伝猿ヶ馬場古墳群他出土遺物観察表

掲載 番号	種類	器種	時期	法量 (cm)			色 調		備 考
				器高	口径	器径	外面	内面	
				[現存値] {復元値}	[現存値] {復元値}	[現存値] {復元値}			
1	須恵器	坏蓋	TK43	4.1	15.0	15.6	7.5Y7/1	7.5Y7/2~ 10Y6/1	神石高原町 (SBB15・SBB18・SBB20・SBB29)
2	須恵器	坏蓋	TK43	4.4	{14.8}	{15.0}	7.5Y8/2	5Y5/2	神石高原町 (SBB17・SBB19)
3	須恵器	坏蓋	TK209	4.0	12.6	14.0	7.5Y7/3	7.5Y6/1	神石高原町 (SBB 1)
4	須恵器	坏蓋	TK209	[4.0]	{14.2}	{14.8}	7.5Y7/1	10Y8/1	神石高原町 (SBB16)
5	須恵器	坏蓋	TK209	{3.9}	{14.1}	{14.7}	5Y6/2	5Y5/1	神石高原町 (SBB 2)
6	須恵器	坏蓋	TK209	4.5	13.3	13.9	7.5Y7/1	10Y6/1	神石高原町 (SBB22・SBB23・SBB27)
7	須恵器	坏蓋	TK209	[3.15]	{13.2}	{13.8}	7.5Y5/1	7.5Y6/1	神石高原町 (SBB21・SBB28・SBB30・SBB32)
8	須恵器	坏身	TK209	[4.3]	{14.0}	{16.3}	5Y7/2	5Y7/1	神石高原町 (SBB 7)
9	須恵器	坏身	TK209	[4.1]	{12.1}	{14.4}	7.5Y7/1	10Y8/1	神石高原町 (SBB13)
10	須恵器	坏身	TK209	3.5	12.8	15.0	10Y5/1	N5/	神石高原町 (SBB 5)
11	須恵器	坏身	TK209	3.8	11.3	13.7	10Y5/1	7.5Y6/1	神石高原町 (SBB 3)
12	須恵器	坏身	TK209	[4.5]	{12.2}	{15.6}	2.5GY6/1	2.5GY5/1	神石高原町 (SBB 6)
13	須恵器	坏身	TK209	{4.6}	{11.0}	{13.5}	7.5Y7/3	10Y6/1	神石高原町 (SBB 4)
14	須恵器	坏蓋	不明	[1.6]	-	[0.8]	5Y7/2	5Y7/1	神石高原町 (SBB24・SBB31)
15	須恵器	坏身	不明	[3.3]	-	-	7.5Y6/1	7.5Y7/2	神石高原町 (SBB12)
16	須恵器	坏身	不明	[2.5]	-	-	7.5Y8/2	7.5Y7/2	神石高原町 (SBB14)
17	須恵器	坏身	不明	[3.0]	-	-	N4/	N5/	神石高原町 (SBB 9)
18	須恵器	坏身	不明	[2.2]	-	0.7	5Y7/2	2.5Y7/1	神石高原町 (SBB 8)
19	須恵器	高坏	TK209	[15.2]	-	15.2	10Y4/1	10Y5/1	神石高原町 (SBB25・SBB33・SBB34)
20	須恵器	提瓶	TK209	20.0	5.0	16.6	5GY4/1	N5/	神石高原町 (SBB10)
21	須恵器	平瓶	TK209	[12.6]	-	15.5	7.5Y5/1	7.5Y4/1	神石高原町 (SBB11)
22	須恵器	水甕	不明	[9.9]	-	-	2.5Y6/1	2.5Y5/1	神石高原町 (SBB45)
23	須恵器	水甕	不明	[9.3]	-	-	5Y8/1	2.5Y5/1	神石高原町 (SBB44)
24	須恵器	水甕	不明	[10.6]	-	-	2.5Y6/1	2.5Y5/1	神石高原町 (SBB41)
25	須恵器	水甕	不明	[3.9]	-	-	2.5Y6/1	2.5Y7/2	神石高原町 (SBB39)
26	須恵器	水甕	不明	[5.8]	-	-	2.5Y7/2	5Y7/1	神石高原町 (SBB35)
27	須恵器	水甕	不明	[7.8]	-	-	2.5Y6/3	2.5Y6/1	神石高原町 (SBB37)
28	須恵器	水甕	不明	[10.0]	-	-	5Y6/1	5Y7/1	神石高原町 (SBB36)
29	須恵器	水甕	不明	[7.6]	-	-	7.5Y7/1	7.5Y5/1	神石高原町 (SBB40)
30	須恵器	水甕	不明	[6.3]	-	-	N4/0	10Y5/1	神石高原町 (SBB47)
31	須恵器	水甕	不明	[2.7]	-	-	2.5Y7/2	7.5Y4/1	神石高原町 (SBB43)
32	須恵器	水甕	不明	[7.6]	-	-	5Y5/1	5Y6/2	神石高原町 (SBB42)
33	須恵器	水甕	不明	[3.4]	-	-	N6/0	5Y6/1	神石高原町 (SBB46)
34	須恵器	水甕	不明	[5.1]	-	-	N4/0	7.5Y4/1	神石高原町 (SBB38)
35	瓦	平瓦	不明	-	-	-	7.5Y8/2	7.5Y8/1	神石高原町 (SBB48)
36	須恵器	平瓶	不明	-	-	-	10Y5/2	10Y6/4	測量調査時表採 (SBB54)

## Surveying of Sarugababa No. 1 Mounded Tombs and Mounded Tombs in the Vicinity of the Late and Final Kofun Period, Jinseki-Kōgen Town, Hiroshima Prefecture

Hisashi NOJIMA, Yui ARIMATSU, Miyako FUNAKOSHI,  
Shintaro UNO, Chihiro TAKEDA, Naoto MORIMOTO

About 40 mounded tombs (*kofun*) were located in Jinseki-kōgen chō, Hiroshima Prefecture. These tombs had corridor-style stone chambers with both sides of the corridor directly in line with the chamber's lateral walls (*musodegata yokoana sekishitsu*) that were built during the Late Kofun period (the second half of 6th century to the middle third of 7th century A.D.). However, no detailed information about them was available to the public at all. The Sarugababa mounded tomb No. 1 is one of the few remaining *musodegata* corridor-style stone chambers in Jinseki-kōgen chō.

The Department of Archaeology at Hiroshima University conducted a field survey of the Sarugababa mounded tombs No. 1 and No. 2, the surrounding topography, and Sue ware (*sueki*), that was believed to have been unearthed from the Sarugababa mounded tomb group (*kofun gun*). Considering the change of *musodegata* corridor-style stone chambers in the Bingo region (the eastern part of Hiroshima Prefecture), Sarugababa mounded tomb No. 1 was built during the TK209-TK217 phase (end of the 6th century to the first half of the 7th century A.D.). However, most of the Sue ware was found to be unearthed from the mounded tomb group, which is slightly older than mounded tomb No. 1. The other mounded tomb groups are thought to have been built before mounded tomb No. 1. Additionally, a field survey was conducted on the mountain ridges around the Sarugababa mounded tomb group. It became clear, however, that all the tombs targeted in the field survey had vanished or were destroyed. The Nakayama-Yotuzuka mounded tomb group was one of those that disappeared. Nevertheless, objects (horse bits and stirrups) are now in the possession of the Hiroshima Prefectural Museum of History. Like the Takafuta-Tsukatani mounded tomb, horse bits with gourd-shaped iron cheek rings (*hisagogata kanjō kagami itatsuki kutsuwa*) are distinctive features of mounded tombs in the Kibi region (ancient province consisting of Okayama Prefecture and the eastern part of Hiroshima Prefecture).

猿ヶ馬場古墳群

図版第 1



a. 猿ヶ馬場第1号古墳石室開口部（南から）



b. 猿ヶ馬場第1号古墳石室奥壁（南から）

猿ヶ馬場古墳群

図版第2



a. 猿ヶ馬場第1号古墳石室東壁（合成写真）



b. 猿ヶ馬場第1号古墳石室西壁（合成写真）

猿ヶ馬場古墳群

図版第 3



a. 猿ヶ馬場第 1 号古墳石室玄室隅角（東壁側）



b. 猿ヶ馬場第 1 号古墳石室玄室隅角（西壁側）

猿ヶ馬場古墳群

図版第4



a. 猿ヶ馬場第1号古墳石室天井石詰石



b. 猿ヶ馬場第1号古墳石室に込められた粘質土（西壁）

猿ヶ馬場古墳群

図版第5



a. 猿ヶ馬場第1号古墳石室玄室部実測状況（南から）



b. 猿ヶ馬場第1号古墳石室羨道部実測状況（南から）

猿ヶ馬場古墳群

図版第6



a. 猿ヶ馬場第2号古墳天井石露出状況（南西から）



b. 猿ヶ馬場第2号古墳奥壁露出状況（南東から）

猿ヶ馬場古墳群

図版第7



a. 猿ヶ馬場第1・2号古墳周辺地形測量風景（西から）



b. 猿ヶ馬場第1・2号古墳周辺地形測量風景（南東から）

猿ヶ馬場古墳群

図版第 8



a. 調査集合写真



b. 平瓶片 (36、S B B54) 表採状況 (南から)

猿ヶ馬場第9号古墳・中山四ツ塚第4号古墳

図版第9



a. 推定猿ヶ馬場第9号古墳崩壊・破壊状況（南から）



b. 中山四ツ塚第4号古墳崩壊・破壊状況（南から）

猿ヶ馬場古墳群

図版第10



伝猿ヶ馬場古墳群出土遺物（1）

猿ヶ馬場古墳群

図版第11



伝猿ヶ馬場古墳群出土遺物（2）

猿ヶ馬場古墳群

図版第12



a. 伝猿ヶ馬場古墳群  
出土遺物 (3)



b. 伝猿ヶ馬場古墳群  
出土遺物 (4)



c. 伝猿ヶ馬場古墳群  
出土遺物 (5)

猿ヶ馬場古墳群

図版第 13



a. 伝猿ヶ馬場古墳群出土遺物（6）



b. 猿ヶ馬場第 2 号古墳表採遺物

中山四ツ塚古墳群

図版第 14



a. 中山四ツ塚古墳群出土轡



b. 中山四ツ塚古墳群出土鑑金具